

学位請求論文の内容の要旨

領 域	健康支援科学	分 野	老年保健学
氏 名	成田 句生		
(論文題目)	Making of a “Manual to support driving resumption of the stroke survivors (Aomori-Version)” to start their support and investigation of its use 支援に取り組み易くするための「脳卒中者の自動車運転再開支援マニュアル (青森県版)」の作成と使用状況		
主 査	和田 一丸		
副 査	山田 順子		
副 査	齋藤 久美子		
副 査	野田 美保子		
<p>【背景】大学院博士前期課程の研究において、自動車運転を再開している脳卒中者を対象として調査を行った結果、運転再開により「一人で自由に行動できる」「行動範囲が拡大した」など生活満足度が非常に高いことが確認された。青森県のように鉄道やバス等の公共交通機関が十分整備されていない地方においては、主な移動手段として自動車を利用することが多いことから、脳卒中者の運転再開に対するリハビリテーションニーズは高いことが推察される。それゆえ、クライアントの主体的な生活の獲得を図ることを治療目的とする作業療法士(以下、OT)としては、脳卒中者の運転再開のニーズに積極的に取り組む必要がある。脳卒中者は麻痺が重度であっても顕著な高次脳機能障害がなければ、運転再開の可能性が高いと報告されている。しかし自動車運転は健常者においても事故のリスクがあり、脳卒中者の運転再開は危険であると最初から決めつけられてしまうことが多い。それゆえ、運転再開の可能性が高い脳卒中者に対しても消極的な対応となりやすいのが現状と思われる。さらに、青森県の医療状況として、脳卒中者の運転再開への支援体制が、その必要性の認識も含めて十分でないことがあげられる。そのため、青森県のOTの多くは脳卒中者への運転再開支援の必要性を感じつつも、対応に踏み込めない状況にあるようである。</p> <p>【目的】そこで本研究では、青森県のOTが脳卒中者の運転再開支援に取り組みやすくすることを目的として「脳卒中者の自動車運転再開支援マニュアル(青森県版)」(以下、マニュアル)を作成し、その使用状況を調査してマニュアルの有用性を検討すること</p>			

(注) 論文題目が外国語の場合は、和訳を付すこと。

【細則様式第1-2号続き】

とした。本研究は、弘前大学大学院医学研究科倫理委員会の承認〔整理番号2013-184〕を得て実施された。

【方法】本研究は、ステップⅠのマニュアル作成とステップⅡのマニュアル使用状況調査の2段階で構成し、各段階でアンケート調査を実施した。アンケート調査の対象者は青森県内の全OT662人とした。多角的視点から意見を収集するために脳卒中者に関与しない分野のOTも対象者に含めた。以下に各段階に分けて結果及び考察を述べる。

【ステップⅠ：マニュアル作成についての結果及び考察】脳卒中者の自動車運転に関連する資料を収集し、評価や訓練及び必要な情報について調べ、更に県内の自動車関連情報をインターネット検索、電話及び直接訪問により調べ、共同研究者と共に検討を重ねてマニュアル(案)を作成した。その結果、マニュアル(案)を2部構成とし、Ⅰ部には、OTが相談を受けた時に支援に取り組み易いように我々が考案した簡便なチェックシート4項目(対象者の情報収集、運転関連情報の提供、身体機能評価、認知機能評価)、及び運転再開に必要なリハビリテーションプログラム(例)の1項目を掲載した。Ⅱ部には、運転再開に必要な情報6項目(自動車運転免許制度、運転適性相談及び適正検査、運転に必要な心身機能、自動車改造の知識、国や地方自治体の主な税制度と助成制度、自動車学校で利用できる設備やサービス)を掲載した。

次に、マニュアル(案)の構成と項目及びその内容の妥当性を検討する目的で郵送による無記名アンケート調査を2013年12月に実施した。アンケートではマニュアル(案)をより良くするための意見収集の目的で自由記載のコメントについても依頼した。その結果、OT154人から回答が有り、マニュアル(案)の構成と項目及びその内容について有効回答者150人の70%以上からそれぞれ妥当であるとの回答が得られた。ただしADL能力を評価項目に加えることについては38%の賛同に留まった。自由記載のコメントはマニュアル(案)Ⅰ部に関して79件、Ⅱ部に関して81件有り、主に表示方法の改善や情報追加を求めるものであった。

以上のことから、マニュアル(案)の構成、項目、その内容については妥当性が認められたと判断した。ADL能力の項目については対象者から承認されたとはいえないが文献でその必要性が示されており心身機能の総合的な指標になることから、共同研究者と検討の上、選択を決定した。コメントを参考に表示方法の改善及び情報追加などの細かな修正を行い、マニュアルをA4版23ページの冊子として完成させた。

【細則様式第1-2号続き】

【ステップⅡ：マニュアルの使用状況についての結果及び考察】完成させたマニュアルを対象者に結果報告として郵送し、2014年4月～10月の7ヵ月間(以下、7ヵ月間)の使用の試みを依頼した。但し、本マニュアルの使用に関しては、完全に対象者自身の自由意志によるものであり強制ではないことを文書で伝えた。

2014年11月にマニュアルの有用性を検討する目的で使用状況について対象者に郵送による無記名アンケート調査を実施し、77人から回答が得られた。その結果、7ヵ月間にマニュアルを使用したOTは77人中6人であり、OT歴は平均 $6.0 \pm 3.3$ 年、現在の勤務先は全員が身体分野であった。一方、マニュアルを使用していない71人のOT歴は平均 $12.8 \pm 8.0$ 年、現在の勤務先は身体分野32人、その他の分野39人であった。マニュアルを使用したOT6人の7ヵ月間の対応者数は18人であり、マニュアル無しの2013年11月以前の平均6年間の対応者数は15人であった。各OTの年換算対応者数は、7ヵ月間では中央値4.25人[2.98 - 7.65]、2013年11月以前では中央値0.38人[0.08 - 2.00]であり、マニュアル使用の7ヵ月間において11.2倍の増加を示した。年換算対応者数はWilcoxonの符号付順位和検定にて有意差( $p=0.028$ )を認めた。OT6人はマニュアル11項目の使用に関して「自動車改造の知識」を除く10項目で半数以上が役に立ったと回答した。今回マニュアルを使用していないOT71人は使用の機会が無い者が殆どであったが、「今後、機会があればマニュアルを(部分的にでも)使用してみたいですか」の質問では、無回答6人を除く65人中「使用したい」が各項目で51～59人(平均57人)であり、正確二項検定にて「使用希望有り」のOT数が「使用希望無し」より有意( $p<0.001$ )に多かった。7ヵ月間にマニュアルの使用無しで脳卒中者に対応したOTが6人いたが6人中5人において「使用希望有り」の回答があった。各項目について、「必要な情報を確認できる」「説明が行い易い」「よく整理されている、このようなのがほしかった」等の肯定的コメントが250件、「項目が多く時間がかかる」「明確な判断基準がない」「検査用具が無い」等の否定的コメントが45件あった。

以上の使用状況の結果から、人数は少ないが脳卒中者の運転再開への支援にOTが取り組み易くするという点に関して本マニュアルの有用性が示唆された。

【結論】「脳卒中者のための運転再開支援マニュアル(青森県版)」は妥当性が認められ、支援に取り組み易くする点に関して有用性が示唆された。本マニュアルは青森県版ではあるが地域の情報を入れ替えることにより全国的にも汎用性があると考えられる。

【細則様式第1-2号続き】

学位論文のもととなる研究成果としての筆頭著者原著

論文題目	脳卒中片麻痺者の自動車運転状況
著者名	成田句生, 石井陽子, 野田美保子, 原田智美
掲載学術誌名	均衡生活学
巻, 号, 項	第7巻, 第1号, 1-7
掲載年月日	平成23年3月

論文題目	Making of a “Manual to support driving resumption of the stroke survivors (Aomori-Version)” to start their support and investigation of its use
著者名	成田句生, 野田美保子, 藤原健一, 小山内隆生, 加藤拓彦
掲載学術誌名	弘前医学 (掲載予定)
巻, 号, 項	
掲載年月日	